

本論文は、1990年代から急速に発展した宗教認知科学・進化生物学の意義と射程を総合的に分析したものである(宗教認知科学は認知宗教学とも言う)。この分野は国内では専門とする研究者が非常に少なく、主要な理論や研究も断片的にしか紹介されてこなかった。その状況に対して、本論文は研究史を時系列的に網羅したという点で画期的であり、今後この分野に関心を抱く者がまず参照するであろう重要な論考となっている。また認知科学が宗教学に何をもたらしたかを論じる主要部分は、宗教学の国際的ジャーナルのうち21世紀に入ってからインパクトファクターが最も高く、かつ宗教認知科学研究の主な発表媒体となった *Method and Theory in the Study of Religion* 誌に掲載されており、国際的にも高く評価されたものである。膨大な量に上るこの分野の研究を国内に紹介するだけでなく、それらを踏まえながらも自らの創造的な分析を国際的に発信しえたという点で、課程博士論文として群を抜いて秀でた研究である。

また、本論文の特色として、宗教認知科学・進化生物学の諸学説の科学内在的評価に留まらず、第一に、宗教学史全体の長いタイムスパンの中にそれらを位置づけ、第二に、それらの背景となる欧米社会の政治的状況、宗教界の反応・応答をも分析していることが挙げられる。具体的には、第一の点については、現在の宗教学における、ポストモダン・ポストコロニアル批評の流れにある研究者と、実証主義的科学観に基づく宗教認知科学系の研究者の間の対立を詳細に描いている。この対立は普遍主義対個別主義、説明対理解・解釈といった人文社会科学共通の理論・方法論上の問題が、近年の宗教学において改めて浮上したものである。第二の点については、欧米諸国では2000年前後から、宗教復興勢力と新たな無神論運動の対立が先鋭化し、「科学と宗教」の関係についての理論的・実践的関心が高まっている。本論文はその状況も丁寧に跡付けているため、読み手の多様な関心に応え得るものとなっている。

したがってこれら二つの特色は本論文の長所だが、宗教認知科学に対する筆者の分析・評価をより詳しく知りたい者には逆に弱点として映るかもしれない。科学論の専門家からは、「科学と宗教」に関する論争を、ある地域・時期に限定しすぎることにより、整理が一面的なものになっていると指摘されるかもしれない。しかしながら、本論文は博士課程進学以降の研究の集大成であるとともに、日本の研究者に対する宗教認知科学のマニフェスト的性格も持つため、その観点からは宗教認知科学を理論としてのみならず、社会・宗教現象としても総合的に分析したことには妥当性がある。欧米で先行して進展したこの研究分野のどの部分が普遍性をもち、どの部分が欧米社会・学界固有の状況に規定されたものかを見極めるのに必要な作業と言えるためである。以上の理由から本審査委員会は、本論文が博士(文学)の学位を授与するに相応しいものと判断する。